Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

幼児のイメージ形成とその最適効果のあり方
2 幼児の表現におけるイメージの実態

後藤保育所　牧 孝子

§1　研究のねらい

幼児は、物に触れたり、物を見たり、聞いたり五官を通して経験し、日々成長するものであり、幼いなりに、受けたイメージを、いろいろに表現する。行動化して、意志を表示したり、拙いことば（言語）によって語りかけたり、ものを描いて心の動きを表示したりするが、表現力は十分でない。然し、幼児の語りかけを、適確にとらえ、その心を読み取り、それによって、教育のあり方をより良く進めて行くことは、めまぐるしく移り変る現代社会の中で、特に、重要なことであることは、周知のことである。幼児は、より良い環境のもとで、良き保育者が、その子らの、年令の発達段階を、わきまえて教育すれば、より良く育つことは、分かりきったことであり、言うまでもないことであるが、具体的に、その方法をということになると、わからぬことが余りにも多い。

一歩一歩その、より良い方向を見出して行きたいと思い、まづ、イメージの生れ出るところから、研究を始めることにした。幼児の様々の表現活動の中から、対象を、絵画表現に選び、描画させることで、目に見えないイメージを引き出していくことにした。

生活経験を豊かにし、幼児の心をゆさぶることによって、或いは、関係づけることによって、次第にイメージが育つものであろうことが予想されるので、その仮説のもとに、研究調査を始めた。

§2　調査対象

・描画（白色画紙・黒色コンテ）

・対象　2才児　7名　　3才児　21名
　　4才児　45名　　5才児　45名
　　園児　計　120名

本研究に入るまで、当保育所では、幼児保育の中で、特に幼児の絵の意味の深さに気付き、昭和37年頃から特に、意を注いで来た。〝誠実で在実〟〝たくましく感情豊かに〟〝生き生きと素直に〟〝明るくのびのび〟などのテーマに向い、研究を重ねるうちに、生活が幼児をつくる　ということを強く感じ、幼児を見直し、〝みつけつくりだす〟をテーマに保育の姿勢の立て直しをしてみたりした。幼児が生活する中での、物との出会いによって、なじみ・いどみ・試み・それを表わす行動を通して、みる目・みつける目、又、やさしい心・ときめきの心が、広げられるように、努力してきた。然し、幼児教育をすすめる上において、幼児の、イメージ形成が、どういう過程を経て育つものであるか、初期段階から、分かりきったことと思われる点から、確実に調査を行うことにする。

§3　調査方法

・保育者と、1人対1人で描く

・対象物が見えない場所で描く

調査1　まづ、第1回目は、平素の生活の中で、ありふれたもので、既に何らかの形でできているであろうイメージを、そのまま表出される様に、教師の働きかけや、手段を用いずに、簡単な指示のみで調査をする。

調査2　第2回目も、同じ方法で、1日後に行い1度のくり返しによって、幼児自身のイメージが、どのように変化するものか、或いは、変化のないものであるかを調査する。

調査3　対象物のある場を設定して、自由に体験させて、幼児自身が、見直し、修正をしたその変化を調査する。

§4　研究の内容

1　まず課題を与えてから描き始めるまでの時間を計ることから始めてみた。その時間と、描く状態の事例をあげてみると

A児　調査1　96秒　→　調査2　5秒（4才）

調査1　少し自信がない

調査2　描く途中で『昨日はカガミを描くのを忘れた』と言いながら描く。

B児　調査1　12秒　→　調査2　10秒（5才）

調査1　知っていることを短時間で次々と描く。

調査2　「この前見たことのある自動車」という具体物のイメージで描いていき、途中での説明が多くひとつひとつ確かめながら描いて何度も修正を加える。

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

「まだ描きたいけどもう描けない」で終る。

C児 調査1 8秒 → 調査2 18.4秒(5才)
調査1 考えながら少しずつ思い出して描く。
調査2 じっくり考えてから「夜に家の前を通る車を描く」と言い、描き始めてから一気に、ある程度描いてしまう。

D児 調査1 3秒 → 調査2 6.2秒(6才)
調査1 次々と休みなく描いていく。
調査2 調査1で描いた絵を思い出して描こうとする。考えながら描く。

以上、特異でない、普通と思われる4人をあげた。調査1より調査2の方が時間が短かい場合が、どの年令も多い。調査1で描いたことがあるということは、調査2に描く時のイメージに影響があるようだ。描く時の状態から、調査2の方が時間が長くなっている場合は、自分の頭の中である程度までイメージを作ってから表現するか、調査1のものを見直してから表現するような者が多いと感じられた。

2 次に、イメージがどのような形で幼児の頭の中にできるものかを知るひとつの方法として、絵に描き表わされる順序を、具体物で調べてみた。課題を与えられてから、改めて自分の絵を見直すまでに描かれた主なものは、自動車では車体・タイヤ、自転車では車輪・ハンドル、鶏では頭・胴とさか、雨ふりでは雨 などで、自分の絵を見直してみて、描き加えられる主なものは、自動車では窓・いす、自転車ではサドル・ベル、鶏では肉ひげ・口ばし、雨ふりでは水たまり・長ぐつ・カッパ などであった。
幼児が始めに持つイメージは、そのものの大まかな印象、例えば特徴・目立つ部分などが主なようで、それから次に細かい部分や機能的なものなどが加わってくるのではないだろうか。このことは今までの調査のうちでは、ほとんど、どの年令においても、又、調査1・調査2 においてもみられた。但し、年令の低い幼児は、描かない物もある。

3 調査1・調査2 に加えて、さらに調査3では、こちらからの言葉かけは変えないが、絵を描かせる以前に、対象物のある場を設定して自由に体験させた。体験するということで、幼児のイメージがどのように変わってくるか知りたいためである。調査3においては、事例に B児をとりあげてみる。B児の調査1・調査2 については、前述の通りである。調査3の体験の状態は、自動車の種類・外部にあまり興味は示さないが、自動車の内部に、非常に興味を示し、大声をあげて、おどろく場面もあった。描く時の状態は、こちらが描く指示を与えるより先に、「自動車を描かせて」と言って描き始める。車体を描いた次に、体験した時におどろきを示した鍵・レバーなどを描く。ガードレールや信号も加わり、体験を中心に描いている。自分の持ったイメージを、見るという体験を通して再認識(見直し)し、それがおどろきになって表現され、そのおどろきによって、より鮮明にイメージ化されるのではないだろうか。
そのように考えると、体験というのは、イメージ形成の上で重要であるようだ。又、B児は、男子で、今機械的なものに非常に強い関心を持っている。対象物に対する興味関心も、イメージ形成に関係していると思う。

4 調査1と調査2の絵を比べてみて、修正ができたものの割合は、2~3才児が 最も大であった。この時期には、調査1から調査2までの間に見直したものがそのまま受け入れられ、それによって、イメージが形成されつつあるのではないか、又、修正がなされず、変化のないものの割合が、年令が増すにつれて大となるのは、ある程度のイメージが定着して、概念化されるからではないかと考察される。このことがらは、イメージ形成を知る上で、今後の研究の一端に加えたい。

§5 今後の研究課題
今回の研究で、試行錯誤のうちに、研究の方向らしきものを見つけることができた。
今後は、幼児の表現におけるイメージの実態を知る というねらいの中で、さらに、幼児の能力に分けて調査したり、描画の対象となる題材を、幼児の生活の中で、できるだけ多く扱うことによって、広範囲でのイメージの実態を、より深く、知ることにしたい。

NII-Electronic Library Service